

【教育実践ノート】

大学における異文化間コミュニケーション能力を育てる授業の試み
 —受講者の気づきに注目して—

A Report from the Course of “Intercultural Training”:
 focusing on noticing by students of Department of Education

金子正子*

KANEKO, Masako*

1. はじめに

昨今はグローバル化する世界に対応する人材の必要性が頻繁に言われている。2012年6月4日には、グローバル人材育成推進会議の審議のまとめとして、『グローバル人材育成戦略』が発表され、「グローバル人材」の概念には、以下のような要素が含まれると述べられている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

一方地域におけるグローバル化も進展し、日本に居住する外国人住民が定住化する傾向にある。平成25年末の在留外国人数は、206万6,445人で、前年末に比べ3万2,789人(1.6%)増加しており、少子高齢化により日本の労働人口が減少傾向にあるため、労働力として日本に定住する外国人は今後も増加するだろうと言われている。

今日は世界においても、日本国内においても、文化的背景の異なる人々と良好なコミュニケーションを取り、協働していくことが求められている時代であると言える。

そして、地域のグローバル化の影響は、国内の学校にも及んでいる。地域の公立学校に在籍する児童生徒の数も増える傾向にある。平成24年5月1日現在¹、公立の小・中・高等学校等に在籍している外国人児童生徒は、約7万2千人である。また、現在は外国人に限らず、日本で生まれ育った児童生徒も、様々な家庭環境や価値観を背景に、全く異なった価値観や行動様式を持つことも多くなっており、上記のグローバル人材の要素のうちの「異文化に対する理解とコミュニケーション力」は、教員を目指す者にとって必須の能力となってきている。

本稿の目的は、将来教員を目指す教育学部生に注目して、大学の授業を通してどのように学生の異文化間コミュニケーション能力を育成することができるかを、筆者

が担当した授業の実践報告という形で考えてみることである。対象授業の受講者は、後述するように様々な大学の日本人学生や留学生、社会人からなっており、それぞれに特徴ある学びをしていたが、本稿では、将来グローバル人材育成の要となる教育学部生の学びに注目して報告することとする。

なお、本稿では、グローバル化する地域において効果的に機能し、職務を達成できる教師の育成という観点から、グローバル人材としての教師の資質を「文化背景の異なる人々（児童生徒や保護者、地域の関係者など）を理解し、良好なコミュニケーションを行う能力」と定義する。

筆者は、2007年度から2011年度にかけてU大学共通教育科目の「異文化トレーニング」という授業を担当した。授業は全学部日本人学生、留学生、そして学外の一般社会人が受講可能であった²。本稿では「多様な受講者が学習活動に参加」しているという観点から、全受講生に占める留学生と社会人の割合の高かった2009年度の授業を取り上げ、その概要と、教育学部生の自由記述を対象に行ったKJ法による分析考察の結果を報告する。

2. 「異文化トレーニング」授業の概要

授業はU大学において2009年度前期に共通教育科目として開講された。受講者は総数55名で、その内訳は、教育学部、国際学部、農学部、工学部の日本人学生が27名、留学生が20名、一般社会人が8名である。留学生の出身国は、韓国、中国、香港、マレーシア、台湾、ロシア、シリア、チェコ、タイで、社会人の年齢層は30歳代～60歳代に亘った。席やグループは毎回くじによって決定したので、受講者は毎回違う相手とペアワークやグループワークを行うことになる。多様な受講者が学習活動に参加していることから、授業自体を「異文化間コミュニケーションのトレーニングの場」と位置付けた。

学習目標は、「文化背景の異なる人々を理解し、良好な

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

コミュニケーションを行うことのできる能力の養成」であるが、特にこの授業では、コミュニケーションスタイル、価値観といった側面に焦点を当て、絶えず受講者からの発言を促す対話型講義を行った。そして、受講者が異文化摩擦の原因や対処法を知的に理解するのみならず、体験的に身に付けていくことができるように、具体的な異文化接触場面の事例を取り上げ、ペアや4人のグループでディスカッションやロールプレイなどの活動を行い、その後に全体で共有してディスカッションするというのが基本的な活動の流れであった。その活動の過程で、効果的なコミュニケーションの方法を学び、実践できるようにした。授業のシラバスは表1の通りである。授業は1回が90分で、14回行われた。すべての授業において対話型講義とディスカッションを行ったが、それ以外の活動方法は表1に示した。

表1 「異文化トレーニング」授業内容と方法

回	授業の主な内容	ロールプレイ	シミュレーション	事例分析	その他
1	見える文化と見えない文化		○		
2	コミュニケーションのメカニズム				
3	異文化摩擦の原因	○		○	
4	ステレオタイプ				
5	言語コミュニケーションと自己開示				
6	高/低コンテキスト・コミュニケーションスタイル、ターンテイクング、パラ言語	○		○	
7	非言語コミュニケーション、ジェスチャー				○
8	表情、アイコンタクト	○		○	
9	対人距離、Mタイム/Pタイム				○
10	エピソードから自分の価値観を知る				○
11	自/多文化理解のためのワークショップ				○
12	アサーティブ・コミュニケーション	○			
13	カルチャーショックを体験するゲーム		○		
14	異文化トレーニングの目標と方法				

3. 授業についての学生の自由記述の分析と考察

(1) 対象と分析方法

対象者は、2009年度に筆者担当の「異文化トレーニング」を受講したU大学の日本人学生のうち、教育学部生10名とした。最終授業において、授業で学んだことや将来に向けて実践してみたいことなどを1000字程度の自由記述で書いて提出するよう求めたのであるが、この10名の記述をKJ法により分析した。まとまりのある内容

毎に名刺程度のラベルを作成し、次に、ラベル内容の類似したものを集めてグループを編成し、各グループに名前をつけた。最終的にそれらのグループを配置して、図解化した(図1)。スペースの関係上、すべてのラベルの内容を図の中に記入することはできないので、グループ毎にラベルをまとめて要約した表(表2)を併載することとする。網掛け部分は各グループの名前である。表には、当該内容に言及した学生数と学生番号1~10も記入した。なお、図中の島(グループ)間の関係を示す関係記号は、川喜田(1997)³に倣い、以下の関係を示すものとする(図2)。

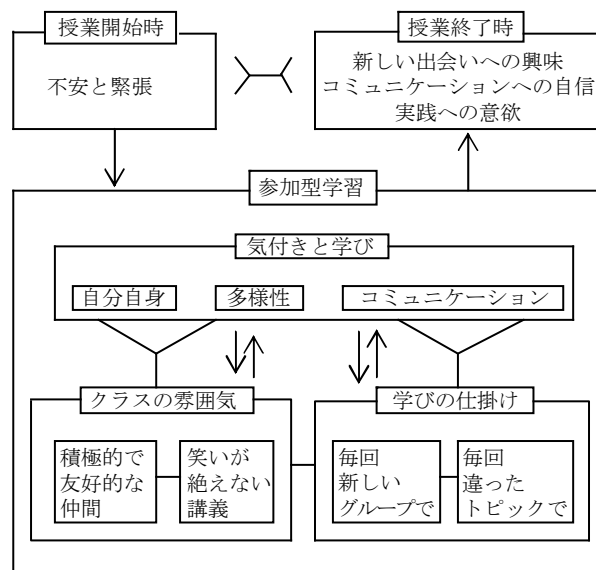


図1 KJ法による図解

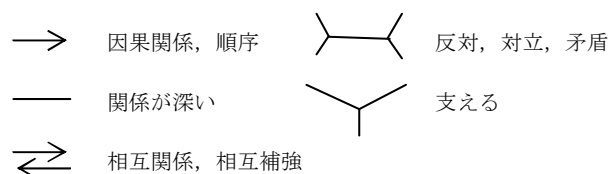


図2 関係記号

表2 教育学部生の自由記述の内容と学生数, 学生番号

自由記述の内容	学生数 N=10	学生番号
授業開始時-不安と緊張	5	
初対面の人・自己主張は苦手だ	1	5
外国人との交流は不安だ	4	4,6,8,9
異世代との交流は緊張する	1	9
参加型学習-クラスの雰囲気	4	
不安や緊張がなくなった	4	4,5,6,9
仲間が積極的で友好的だ	1	4
笑いが絶えない教師の進行	2	4,9
参加型学習-学びの仕掛け	9	

様々な人と交流でき楽しかった	9	2以外
様々な人から多くを学んだ	9	2以外
毎回違ったテーマが新鮮だった	1	6
授業外でも交友関係が広がった	4	3,4,6,8
自分自身への気付き	3	
自分の考え方や行動に気付いた	2	1,6
自文化を押し付ける自分に気付いた	1	2
多様性への気付き	8	
価値観の多様性を実感した	4	2,5,6,10
自分と全く違う考え方に会った	5	3,6,7,9,10
文化による感じ方の違いに気付いた	1	4
違いの理由を知りたくなった	1	9
コミュニケーションへの学び・決意	10	
理解しようとする姿勢の大切さ	2	6,9
伝えることの大切さ	1	5
笑顔や表情の大切さ	1	8
高/低コンテクストコミュニケーション	1	4
コミュニケーションのフィルター	1	5
場面や相手による方法の使い分け	1	7
価値観やステレオタイプの違い	1	8
自分を持ち、自己主張をしていきたい	1	5
他の国の人ももっと関わってきたい	2	3,6
海外に留学や旅行に行きたい	3	7,9,10
様々な人と良好な関係を築きたい	2	8,9
子供の気持ちの分かる教師になりたい	1	2
笑顔でいられる教師になりたい	1	4
在日外国人との共生のため行動したい	1	1

(2) 結果と考察

①参加型学習について—変容と学びを支えるもの

ラベルを配置して図解化してみたところ、受講者が、参加型学習のプロセスを経て、変容していく様子が見えてきた。また、参加型学習における学生の気付きと学びを支える構造としてのクラスの雰囲気や学びの仕掛けが明らかになった。学びの仕掛けとは、毎回違ったトピックで新しい仲間とグループワークをすることである。以下に図解からわかったことを詳述する。

授業開始時には、学生6（以後、学生をSと略称）の「授業が始まった当初は、日本人と同じくらいの割合でたくさんの留学生の方が受講していて、私は教育学部で英語にも全く自信がないし、他の国の人と交流をしたことがなかったので、正直、戸惑いと不安があった」やS5の「私は人見知り激しく、初対面の人とうまく話せるのか緊張で頭がいっぱいだった」に見られるように、多くの学生が初対面の人や外国人との交流に対して不安や緊張を感じていたことが窺われる。

しかし、授業終了時には、「毎回違う人とグループ活動を行っていくうちに不安が消え、新しい出会いを楽しみにするようになった」（S6）とあるように、新しい出会いに興味を持つようになり、「講義でフィルターの違いや価値観の違いなど様々なコミュニケーション間に生じる問題・課題などを勉強していくうちに、私ももっと人とコミュニケーションをとってみよう、異文化の人のことももっと知りたいと思うようになっていた。その結果自分から積極的に相手の意見・考えを聞き、留学生にはその国の文化背景についてまで聞くことができるようになった」（S5）と自分自身のコミュニケーション力に自信が持てるようになっていた。また、「将来社会に出て、自分とは異なる文化や価値観を持つ人と出会い、一緒に生活していくことになると思うが、相手のことを遠ざけるのではなく、理解しようと努力していきたい。不快に感じることもあったとしても、問題点を話し合うことにより、様々な人と交流を持ち、信頼し合える関係を築いていきたい」（S9）と、実践への意欲を持つまでに変容してきていることが窺える。

このような変容を引き起こした参加型学習の学びを支えるクラスの雰囲気についてであるが、S4が「毎回初対面の人と自己紹介し、問題について一緒に考えた。初めは緊張していたが、みんなフレンドリーで優しくて、ほっとした」と述べているように、友好的なクラスメートとの交流を通して、緊張が解け、安心して授業に参加するようになってきていることがわかる。また、S9の「先生が笑顔で授業を進めていることもあり、毎回授業は笑いの絶えないもので、すごく楽しいものだった」と述べていることから、教師が発言しやすいリラックスした雰囲気を作ることも学生が積極的に意見を述べる助けになると思われる。

学びを支える仕掛けとしての出会いについては、上述S6のように「新しい出会いを楽しみにするようになった」のみでなく、「毎時間グループの人が変わり、初対面の人ともたくさん話せたし、面白く、かつ納得できることを学ぶことができた」（S1）とあるように、〈新しい出会い〉と〈学び〉と〈面白い/楽しい〉を並べて述べる学生が多く、新しい出会いを互いに楽しみ、学び合っている様子が見える。

学びの仕掛けのもう一つの要素であるトピックについて、S6は「毎回違ったテーマでいつも新鮮な気持ちで取り組むことができた。」と述べている。理論につながるトピックや課題が、活発なディスカッションと興味深い学びのために重要な要素であることがわかる。

参加型学習における交流やディスカッションは、他者の様々な主張との対比により自身の思考を相対化し自己検証したり、批判的思考力を養成したりと、大きな学習成果が期待できる一方、議論の前提としての理論がなけ

れば、ただの雑談になってしまう恐れがある。異文化間コミュニケーションに関わる基礎的な理論をよく吟味してシラバスに組み込むことが重要であることは言うまでもないだろう。

また、S6は、「自分がその状況に入り込んで演じたりして、とてもよい雰囲気、わかりやすく、楽しかった」とも述べている。参加型学習のロールプレイやシミュレーションなどの様々な方法が効果的であると考えられる。

②自分自身への気付き

S1とS6は、「自分の考え方や行動のタイプに気付いた」と述べている。また、S2は、BARNGA（異文化摩擦を体験するゲーム）を通して、「自分の文化を相手に押し付けてしまう自分に気付いた」と述べている。授業で扱った理論やシミュレーション活動が、自分の行動パターンに気付くきっかけになっていることがわかる。

③多様性への気付き

ほとんどの学生が多様性への気付きに言及していた。

S2の「自分の価値観、考えがすべてではないということを実感することができた」にあるように、「実感」という表現、あるいはそれに近い表現をした者が4名いた。これは、理論だけでなく、実際に他の学習者と交流したからこそ出てくる表現であろう。また、「私が思っていたことと正反対な考えを持った方や、私には考えられない違う考えを持った人がいました」（S10）に代表されるように、自分が想定していた度合いを超えて多様であることに驚いたという者が4名いた。これまでに多様性について聞いたり学んだりしたことはあっても、やはり自分の「常識内」で多様性を想定していたようだ。人は気付かず自分の常識に縛られ、その範囲内でしか考えることができないということを示していると言えるだろう。

また、受講者の中には、単に驚いたということでは済ませず、「どうしてこんな風に思うのだろうか」と色々相手のことについて知りたいと思うようになった（S9）や、「自分とは全く違う感じ方や考え方をする人に出会い、『こう考えているからそう思うのか』という発見がたくさんできた」（S7）にあるように、多様性の背景にある考え方や価値観などに関心を持って知ろうとする姿勢、あるいは発見できたことへの喜びを述べている者もいた。自分と異なった者に出会ったとき、それを避けて関係を絶とうとするのではなく、理解しようという気持ちが育っていることは、授業の目的でもあり、大変うれしく思う。

④コミュニケーションに関する気付きと学び

受講者はグループワークによる交流から、コミュニケーションについて気付きを得たり学んだりしている。S9

は、「どの人も相手のことを理解しようという意識が伝わってきて、やっぱりそういう気持ちが重要なのかなと思った」と述べているし、S6も「相手のことを聞き、相手のことを知ることでコミュニケーションもうまく取れるし、楽しいものになると思うようになった」と述べ、相手のことを理解しようとして相手の言うことに耳を傾けることの大切さに気付いている。また、S5は、授業開始時には自己主張は苦手だと感じていたが、交流を通して、「自分のことを伝えなければ相手に理解してもらうことはできない」と気付いたと言っている。そして、S8は、授業開始時には、初対面の外国人と理解しあえるか心配していたが、留学生との交流を経験した後、このように述べている。「その人の日本語は完璧ではなかったが、その笑顔、表情から、私に好意を持って話してくれていることは容易に伺えた。これだ！と思った。私も良い笑顔、豊かな表情で接すれば、仲良くなるのに言葉などたいした問題にならないはずだと思った。そして、その通りだった」。このような受講者の記述から、彼らが参加型学習による交流を通して良好なコミュニケーションのために何が大切か気付くとともに、コミュニケーションへの自信を高めていっていることが窺われる。

一方、学生たちは、グループワークによる交流からだけでなく、毎回の対話型講義の中で教師が提示する異文化コミュニケーションに関わる様々な理論からも多くを学んでいる。S4は、「低 / 高コンテクスト・コミュニケーションについて学び、日本人は高コンテクスト過ぎる感じた。言いたいことがあってもはっきり言わなかったり、相手のことを察して言葉を発しなければ“KY”と言われるりするの、億劫に感じる。もっとフレンドリーに話せる方法があるのではないかと述べている。S4は授業で初めて低 / 高コンテクスト・コミュニケーションスタイルという概念を学び、自分の周囲のコミュニケーションの取り方について疑問を持つようになり、よりよい方法はないかと考えるようになったようである。

日本では世界で最も高コンテクスト・コミュニケーションスタイルの傾向の強い国であり、言語による明確な表現は避けて文脈⁴（context）から互いに相手の意図を読みとることを求められることが多い⁵。受講者が、世界には異なるコミュニケーションスタイルが存在し、国や文化によって、言語と文脈のどちらに重点を置いてメッセージをやりとりするかが異なるということを理論的に理解することは、将来置かれた場で適切なコミュニケーションができるようになるために必要なことであろう。

理論からの学びのもう一つの例として、次の記述を挙げることができる。「価値観やステレオタイプは人それぞれ違う、ということが印象に残っている。自分がされたらうれしいことが、相手にとっては嫌なことである場合もある。コミュニケーションを円滑にするためには、相

手の価値観やステレオタイプや性格などを判断する観察力や聞く力も必要になってくる。日々の生活の中で自分の価値観を相手に押し付けまいと思おう(S8)。この記述から、S8が価値観の多様性についての学びを自分のコミュニケーションのあり方に結びつけて捉え、実践しようとしていることが伺える。私たちは自分の価値観が正しいと考え、行動しがちであり、またそのような自分の姿に気付かないことが多い。しかし、S8は、「自分がされたらうれしいことが、相手にとっては嫌なことである場合もある」ことに気付き、「自分の価値観を相手に押し付けまいと思おう」と述べており、価値観の多様化している世界や日本において今後生活していく上で、大変大切な気付きであると言えよう。

⑤ 将来への抱負

受講生は自由記述の中で将来への抱負も述べている。それは3つに大別できる。

第一のタイプは、「留学や海外旅行などをして、自分の文化や価値観がアウェイの状況で色々な人と交流してみたい」(S9)に代表されるように、個人として海外で交流してみたいという抱負である。是非実際の経験の中で、学んだことの理解を深め、実践してほしいと願う。

第二のタイプは、「将来教師になったとき、教室には、それぞれ違った文化、価値観を持つ家庭から来た子ども達が集まって来ていると思う。何か気付いたり、問題が起こったりしたときは、この授業で学んだことを生かし、最初からその子を否定したりしないで、じっくり話を聞いてあげたい」(S2)のように、教師として学んだことを生かし、実践していこうという抱負である。授業では、エポケー(自分の判断を留保し、相手に傾聴する技術)も練習した。是非生かしてほしいと思う。

第三のタイプは、「グローバル化により、母語の異なる人々の間でのコミュニケーションの機会が増大している。しかし、日本社会には、まだよそ者排除意識といったものが沈殿しており、在日外国人との共生・共存を実現するためには越えなければならない課題も少なくない。『外国人にとって住みやすい社会』をつくるために、まず自分がどう行動するか、しているかということ意識していきたい。お互いの意見や文化を尊重すること、

外国人にとって望ましい社会や人権意識を考える大切さをこの授業を通して学ぶことができた」(S1)のように、日本社会での多文化共生のために自分がどう行動するかを意識し、学んだことを生かそうという抱負である。授業でも外国人住民とのトラブルの例を取り上げた。今後日本で益々必要とされる姿勢であろう。

4. むすびと今後の課題

学生の自由記述をKJ法により分析した結果、異文化間コミュニケーションに関わる基本的な理論を理解し、参加型学習の中で様々な異文化摩擦の事例の原因と対処法を共に探求したり、疑似体験したりすることにより、学生のコミュニケーションへの自信や意欲を高めることができたことが明らかになった。

本稿のはじめに述べたように、今日では、日本社会、地域、学校、職場、すべてにおいて同質性が失われ、日本人どうしでも異文化間コミュニケーションの対象となってきている。そして、互いに違うという前提のもとで、自分の考えをきちんと説明し、敬意を持って相手の説明を聞き、あきらめないで接点を見つけていくという、言語によるコミュニケーション能力の必要性が増している。

このような時代に教師を目指そうとする学生たちには“グローバル人材”として文化背景の異なる人々を理解し、良好なコミュニケーションを行う能力を身につけることが求められる。異文化間コミュニケーションに関わる様々な理論を理解し、自分や自分の属する集団のコミュニケーションスタイルを認識し、相手や場面にふさわしく聞いたり発信したりできるようになることが期待される。この授業報告では、そのような能力育成のための一つの方法を示した。

今回報告した授業は、外国人留学生や一般社会人も受講する多様性の高いものであったが、受講者が同年代の学生のみであった場合でも、学ぶことは十分であると筆者は考えている。以前この授業を日本人学生のみを対象として行ったことがあったが、それでも、学生は深い気付きや学びをしていた。要は学びの仕掛け、つまり、トピック(シラバス)と参加型学習の進行のしかた、そして、受講者の学習への参加姿勢が鍵ではないかと考える。

—注—

- 1 文部科学省『日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成24年度)』2013
- 2 この授業は大学コンソーシアムとちぎの「オリジナル授業科目」として登録されていたため、一般社会人も受講が可能であった。筆者は、限られた気の合う同世

- 代の集団の中でのみコミュニケーションを取る傾向にある学生が、異世代の人と交流する機会を持てることを願い、社会人も受講できるこの制度を利用した。
- 3 川喜田二郎『KJ法入門コーステキスト4.0』KJ法本部・川喜田研究所、1997

- 4 この場合の文脈とは、「どのような場面・状況で、だれが言ったか」などを意味する。
- 5 例えば上司から「この間の件、早めに頼むよ」と言われた場合に、状況や相手の性格などから、「早め」とは、いつ頃までを意味しているかを察して理解するようなコミュニケーションの取り方を高コンテキス

ト・コミュニケーションスタイルと呼ぶ。一方、「今日夕方 4 時までには A プロジェクトに関する企画書を私まで提出してください」のように、言語で明確に伝えるコミュニケーション方法が、低コンテキスト・コミュニケーションスタイルである。文脈への依存度の高低から、このように呼んでいる。